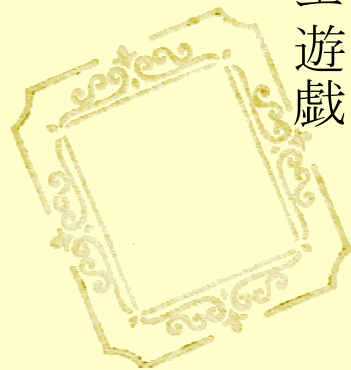


RS / 記憶の湖クリア後
雪と1号リバーシブル
web再録 (改稿)



アトリエ遊戯

R18
for adult only

あれは少し前の事だ……



花屋で仕事を済ませた後に、画廊にも用があつたので寄つた時のこと。

店の裏手に回つて屋内に入ろうとしたら、アトリエで1号が一人で『お楽しみ』だつた。

偶然見てしまった。偶然扉が少しだけ開いていた。

見ちゃいけないモン見ちまつたつて気持ちですぐに背を向けて、暫く待つことにした。まあ、用事もあることだし。

数分か、もう少しか、経過すると1号が向こうへ行く足音が聞こえた。どうやら終わったらしい。

中へ入つて1号が座っていた辺りに行くと、足元に春画が落ちていた。

若干印刷ズレしただけのもので、ははーん、さては店頭に出せない不合格品だから捨てるくらいなら使わせてもらおう、つてところだろう。

つていうか俺もその手は使つたことがある。

その場に座つて落ちてゐる絵を一枚一枚確認していく。

…と、イイモノを見付けてしまった。

悪戯心が湧き上がる。

戻つてきた1号に春画をべろつと持ち上げて見せた。

「1号ー、染みが付いてるぜ、どうしたんだこれはー？」

そうからかつて聞いたのに、1号は身を屈めて覗き込むと

「ああ、さつきの精液で汚したか……」

なんて答えてきやがる。出鼻を軽く挫かれた気持ちだ。

紙片を摘まんでいた指を開いて、そのままひらりと床へ落とす。

「おまえさー…何やつてたかわかるけど、もうちよつと隠すとか恥ずかしがるのか無いのかよ」

「恥ずかしいつて感覚は無い。生まれてこの方、常に見られているのが当たり前だったからな」

「ああそうだったな」

「見られちゃまずいのは知ってるから普段は隠れてるぞ。裸とかああいうのは見た方が困るらしいし、場合によってはオレも面倒な事になるし」

「だーつたらなんで俺には隠さない？」

「雪はオレの生い立ちを知ってるから、別に良いかと」

「ああそうだなつと」

「雪はどうしてるんだ？」

「何が」

「一人でする時、いつしてるんだ」

「いつって……夜とか一人の時とかだろ」

「オレにはいつそういう事してるのか分からない、上手く隠してるんだな」

「まあなー」

「じゃあどこでしてる？」

「それは……秘密だ」

「少しくらい教えてくれても良いのに」

「言わねえよ」

「ダンジョンで長くなる時とか困らないか？」

「そんなの、暫くしなくなつて死にやあしねえだろ」

「そうか……じゃあ……ネタは？」

まだ続けるのかこの話題。ちよつと驚く顔を見てやろうつてぐらいのつもりだったのに。

好奇心が強くなってガキみたいだよな、なりはデカイ癖して……まあ、話題は選んで欲しいんだが。

雰囲気からして、何かしら答えないと気が済まずに質問が続きそうだった。仕方ない、適当に答えるか。

「オカズは……つと」

ちよつどいい物が足元に転がってる。

「この辺なんか代表的だろ」

足元に散らばる数枚の春画を指差して見せる。

「ああ、オレもよく世話になってる」

納得しているようで何よりだけど、わざわざ言わなくなつていいぞ、ついさつき使つてたつて分かつてるから。

俺の場合は兄さんじゃないのか？つていうと、それはもう基本中の基本で当然過ぎることだ。

ただ、その時々で気分色々だ。

「店頭でも決して安くはないのによく売れるよな」

「在庫が少なくなつてきて、今日は印刷をしていたんだ」

その時に出た刷り損じか、足元には何種類かあつて、帝国のいわゆるキングスター時代のシリーズだった。あの時代の人物像は人気が高い。

先代さんが女好きで集めた后達とも言われるが定かではない。実際の後は男だからな……

なんにせよ見る目は確かだったようで、美人揃いだし、なかなか飽きが来なくて何度お世話になったことか分からない。名作と謳われるのも頷ける。

幾つか眺めていく内に、気になる絵があつた。

紗智と昇華：1号の母親と祖母らしい。

祖母は代が離れてるからともかく、母親とはあまり似ている気がしなかった。

1号は父親そっくりだ。厳密に言うとな俺が知ってるのは父親のクロインの番号に酷似しているって事だ。

母親の方はあくまでも絵だから実物とは違うんだろうか。

いっそこいつに黒ロングのウィッグ被せてセーラー服着せてみたらどうだろう、絵と同じようなポーズを取らせて……ちょっと見てみたいな。

それに春画になるくらいだ、かなりの淫婦だったなんて噂もある。

上二代こういう世界で名を残してるってどういうことだよ、こいつもけっこうそういうヤツなのか？

色々変に考えがめぐってまた1号をからかいたい気持ちになってきた。

ところが。

不意に1号の手が伸びてズボンの中に入り込んできた。

「ちよっ、やめ……ひっ！」

触れた手が一通り撫でたと思ったらかなり強い力で掴まれて、情けない声が出てしまった。

嫌な汗が滲んできてくる。

「人の急所を、そんな力で……まさか潰す気か」

「いや、反応しているのかと気になって」

1号の手の力がいくらか抜ける。

「反応……？」

「随分熱心に見てたから」

ああそういうことか。

考え事しながらなんと床の絵を見てたから、俺が妄想してるように見えたってことか！

ったく。折角それとなく話題を逸らして行こうと思っただけなのに全然ダメだ！

こいつにはまどろっこしいやり方や伝わらねえ。

「でも、そうでもなかったみたいだな」

「ただ見るだけで勃つかよ」とっさに返したものの、あまり意味のある事は言えなかった。視覚情報には弱いから勝手に反応することもある。でも今はそういう気分じゃなかった。

「それもそうだ」

何を納得したのか分からないが、1号は今度は俺のを握るように握りだした。

「痛てっ、強い、もうやめる！ 手え放せ！」

「これじゃだめか……」

独り言のように呟きながら、1号は手の動きを変えてくる。

今度はそっと握る程度にしてさすられる。

「あ……少し硬くなってきた」

まるでおもちゃで遊ぶ子供みたいに楽しそうな顔をしてる。つて言ってもやってることは洒落にならないんだが。

「つぎけんな、1号！ いい加減放せ！」

「いいじゃないか、雪もしていけば。折角気に入った絵があるみたいだし」

「違つげえよ！ いや、気に入ってないってわけじゃねえけど。つてそうじゃなくつて！」

「大きくなつてきてるぞ」

「それはおまえが……」

急に力いっぱい掴まれて過剰に緊張したりとか、それが解けたところで刺激されたりとか。

全部1号のせいだ。

癪に障るが体の反応が止まらない。

いつまた強い力が掛かるかという恐怖と緊張。それに加えて他人の手でされるなんていう状況に鼓動が速くなって、興奮との違いが分からなくなる。

だいいち涼しい顔してなんだ、人のモノだけ勝手に弄り回して、おまえはどうなつてるつていうんだよ！

何故か対抗心が拒絶と反抗に勝つてしまい、やり返すように1号のズボンの中に手を差し込んで握つてやつた……のはいいが、思ったよりも硬さと体積があつて一瞬引いてしまった。

「おまえ……半勃ちじゃねえか。今やつたばかりなんじゃなかったのかよ。萎みきつてなかった？ ……それともまた絵を見て反応した？」

直接触られたというのに、1号は驚きも振り払いもしない……まあ、予想してなかったわけでもないが。

「さつき一度して出して終わりにするつもりだったけど……続けて何回かすることはある。雪もそうだろう？」

そうだろうつて言われても返答に困るし、そういう会話をしたいわけじゃないし。勢いで掴んでしまったからには引きがたい。

ここは一発抜いてやればコイツの頭も醒めてこんな変な遊びは終わりになるだろう。会話も御託ももういい、やるしかない。

本気でイカせるべく、手を動かしました。

俺はおまえみたいな下手クソとは違う。すぐにイかせてやるからな。

竿を擦り、滲み出した先走りを手のひらに絡めて先端から根本まで塗り広げる。

その間にもどんどん手の中で硬さと大きさが増していく。

しっかりと上向いたところで、片手で根本から幹全体を圧迫しながら、開いた方の手で亀頭の裏側、少し下辺りを刺激する。更に括れとその周りも。

これは効くだろう？

1号は無言で刺激に耐えながらも一所懸命に手を動かして、なんとか俺を昂ぶらせ

ようとしているようだった。その顔は少し赤い。

手淫はたどたどしく、ある程度までは俺も高められたが、その先へは進まない。七分か八分か、そんな所でまったりとしてしまい、むしろ1号を攻めるのを邪魔されずに集中できるから好都合だった。

刺激を続けるうちに1号の竿から亀頭の表面までガチガチになった。もう一押しだ。そんな風に俺は余裕でいた筈が、気が付くと1号の手の動きが変わってきた。

だんだん良い感じに刺激されて……これは……やり方を真似されてる!? 俺の与える動きを、それもけっこう的確にトレースしてくる。

見る間に興奮が高まり、体温も息も上がってしまう。

どうやら俺は自分の好みを1号に知られてしまった、というか自分から教えてしまったようだ。

不覚だった。

こんな間近で顔も体も見られて、感じていることはモロバレだろう。ダメだ、一刻も早く終わりにしてやりたい。

先程までよりかなり強い力で握って、1号の表情を見ながら痛みに顔を顰めるかどうかギリギリの加減を探りつつ、長いストロークで激しく抜いてやる。

それに合わせて1号の息遣いが乱れ、小さく声も漏れ始める。対照的に俺を刺激している手の方は若干疎かになっていた。

この調子だ、やれる。

更に手を速く動かして刺激をすると、自分の手元を見ていた1号はふっと顔を上げた。た。

随分と熱っぽくなった視線が絡みドキリとする。その上、俺の事も力強く刺激してきた。

「雪……」

このタイミングで名前を呼ぶか!

「ハアハア……はあ……ゆ、き……」

やめろ、何度も呼ぶな。

「っ……雪……もう…………出るっ!」

1号の瞳と、俺を呼ぶ声と、熱く濡らされた胸と、目の前の全部が重なってゾクリとした。

止める間も無く、1号の後を追うように俺も射精していた。

最後は1号の手でさせられたのか、自分で勝手に昇りつめたのか、はっきりと分かんなかった。

それなりに息が荒くなっていた。

何度か深呼吸して落ち着ける。

気分もすっきりと冷めていく。

目の前で同じように息を整える1号の頭にぼんと手を置いた。

「気は済んだか、1号?」

こくりと頷かれる。

俺達何をしているんだろうな……

俺がこいつをからかおうとした所為ってヤツなのか？

「絵……要らなかつた」

「なんだって？」

「雪としてたら春画のことを忘れた、全然見てなかつた。これは雪がオカズという事なのか？」

「気持ち悪い言い方すんな！ 自分一人でしたんじやないだろ？ だから違う！」

「そうか、よくわからないけれど、そうなのか……」

「おまえのバカには付き合ってらんねーや」

その後、体を拭いて衣服を整えると、不思議なくらいいつも通りの空気に戻った。まるで非日常的なエロい事を二人でしていたのが嘘みたいに。

長年に渡り付き合いがあった、その時間の為せる業なんだろうか。



……思ったより回想が長くなつた。

なんでこんなことを振り返っているかという、また1号とそういうことになっていくからだ。

二人でいたら突然ぐいっと腰を抱き寄せられて、「遊ぼう」と。

まあ、暇だからってこいつの部屋にのこのこやって来た俺も俺だ。大人しく誘いに乗った。

これで何回目か。

1号から手を出されたり、俺から仕掛けたり。

最初の時こそ、俺とコイツでありえねーことをしていると、馬鹿力の手に自分の大事な場所を預けるなんて正直ビビる気持ちはあつた。

でも人間慣れちまうもんだな。

二度目には恐怖感も抵抗感もなくなつて、三度目か四度目には少し物足りなくなつた。

あんまり変わらない事を繰り返すのは流石にな。

けれどその問題については毎回1号が腕を上げてくるから、なんとかなってる……まつたく、悔しいやら嬉しいやらだ。

そんなこんなで、この前はキスマまで許しちゃまつた。

向かい合つて膝立ちになつて擦り合つていたら顔の高さが丁度良かった……というの

も、言い訳がましいな。

頭の中まで熱くなつて、止められなかった。

1号にズボンを脱がされる。

構わないか？動きやすくなるからこの方が良いだろう。

今日もとつとと終わらせてやる。

何度かしての実感だが、自分の方が先にイクのは好ましくない。

出し尽くした後のどうしようにもならない気まずさ。しかも相手の興奮は最高潮に近い。このテンションの差がある中、1号が出すまで抜いてやるつてのはかなりのサーピスだ。まあ……抜いてやるとそれなりの達成感や満足感は何れられるけどな。

1号が先にイけば手が止まったっていいんだ、後少しの刺激は自分で何とかする。……っていうのが理想なんだけど、いつもそう上手く行くとはい限らない。

互いに刺激し合つて暫く……どうにも様子がおかしい。焦らされている感じがする。

1号はやれば出来るのに、もつと強くてクリティカルな刺激を与えることが出来るのに。わざと緩やかな動きで時間を掛けようとしているみたいで……

足りない、すぐにでももつと強い刺激が欲しい。

いくら達するのは後の方が良かったって、テンポが合わないのも白けるだろう！促そうと1号に強めの刺激を与えてやつてもペースを崩さない。

焦れつたさが増していく……

「1号：今日は一体どういうつもりだ？」

答えは無く、手の動きは止めずに微かな笑みを浮かべているだけだった。

これじゃあ埒が明かない！

とうとうもどかしさに耐え切れなくなつて1号を押し倒した。

仰向けにした1号の腰を跨ぎ、直接擦り付ける。二本まとめて握つて腰を揺する。

1号がよく濡れてローションなんか要らなくて、本当にやつてるみたいだ。騎乗位つて感じだな。

……いや、そう言うとお上になつてる俺がこいつのを啜え込んで腰を振つて抱かれてるみたいか？ じゃあ正常位か……まあいいやどっちだって。

1号は少しの間驚いたようだがそのままだったが、やがて片手を俺の手に重ねて強く包んだ。

「分かったか？ 俺のやりたい事」

首を起して頷き、1号は更に手に力を込めてくる。

興奮と楽しさが膨れ上がり、更に刺激が欲しくなった。

1号の手ごと振りほどき、シャツを脱ぎ捨て、体を前に倒した。

下腹部を密着させて体だけで擦ると一気に性器への圧迫感が増した。

十分なぬめりを纏つて、なめらかで弾力のある腹の肉に包まれている。熱く重たい剛直が腹を抉る様に動く。

抱いているような抱かれているような、どちらともつかない感覚が押し寄せる。

「雪、これ凄いつ…：気持ち良過ぎる…！」

1号は伏目がちになつて、瞼をぎゅゅつと瞑つては薄く開くことを繰り返していた。良い表情だ…：

そう思った途端、そそられてしまったのだろうか。

一気に込み上げて来た。先にいくのは御免だと思つたけれどそれに反してどうしようもなくイキたい、気持ちも体も止められない。

衝動に抗えずに果てて数秒、目の前が白くなりかけた。

息の整わぬまま見下ろすと1号はまだだが、昂ぶりきつている。もう少しといふところだろう。

両腕が上がり、俺の頭を強引に引き寄せて唇を塞いだ。すぐさま舌を捻じ込んでくる。俺の舌を探り当てると掴まえて逃さないような勢いで吸う。

腰を迫り上げ、イつたばかりの俺のモノに、下腹部に、滅茶苦茶に押し付けて擦る。

うわっ、やめろよ！

俺はもう醒め掛けてるつてのに、俺だけ素の状態でこんなに熱っぽくキスされるなんて…：擦られまくるなんて…：

俺はおまえの人形かおもちやみたいじゃねえか！

だから先にいくのはイヤなんだ。

でも熱くて、汗と精液で二人の体が貼りついたみたいになって…：脳まで痺れて…

なんか色々通り越しちまつて寧ろ悪い気がしないっていうか…：…：

気持ちいい…：

そう思った瞬間に腹から胸に掛けて熱い飛沫が奔つた。体の痙攣がじかに伝わってきてゾクゾクしながら同時にほっとひとこちがつく。

やっといつたか…：

塞がれていた唇も解放されて、深く息を吐くと体が弛緩するようだった。

顔を上げると、1号と目が合う。

俺の影になつていたが、真っ直ぐに見上げてくる瞳の端が光を弾いていた。

1号は俺から目を離さずに言った。

「セックスしよう」

思いもよらない言葉に、頭を後ろからガツンと叩かれたような感覚がした。まるであの時のベガの尻尾みたいな…：いやいや、現実逃避してる場合じゃない。

叩かれついでにグラリと来たがなんとか堪えた。

「バーカ、するか！ 俺とおまえのしてるのは遊びだ」

「そうか…」

1号はあっさりと引き下がり、俺を抱きしめていた腕も解いた。

さみしそうな顔をしていたり、しよげたりはしていないよな？

突き放しておきながら妙に気になってしまふ表情をつぶさに見たが…：大丈夫そうだ。

1号の上から退いて、腕を引つ張つて体を起こさせる。

「ほら、シャワーでも浴びて頭冷やして来い」

1号が立ち上がったって風呂場へ行くのを見送って。
ベッドに身を投げ出した。

気愈くて服を着るのも億劫で、適当に体だけ拭いて薄い布団を腹にかける。

1号はすぐに戻ってくるだろうけど……いいか、このままで。少しすればアイツの気分も変わって通常モードになるだろう。

本当のところは……さっき体を重ねていて、1号に啞えさせたいとか、あのまま繋がっちゃいたいとか、全く思わなかったっていうと嘘になる。

気分が良くて熱に浮かされるから、体と心は繋がっているから。

どうしてもこれはだめだとか、絶対にここまでっていうのも実は無くなっている……慣れの所為か、恐ろしいな。

もし今後、1号が強引にしようとしてきたら止めきれずに受け入れてしまうかも知れない。

もしかしたら俺の方が歯止めが利かなくなって喰っちゃまうかも知れない。

あいつとヤったらエラく心拍数が上がりそうだ、俺の心臓もつかない……

ぼんやりとそんなことまで想像してしまい一人で気まづくくなる。ハハ、なに考えて

るんだ。

俺達は一体どこへ行くんだろうな……

一度きりの過ちで終わらずに何度もしてるのは、お互いそれなりに思ってるってことなんだろう、多分。

今までいつもなんとなく始まって、気分が良くなるどころまでやって終わって、あつさりしてたけど。

聞いておきたいものだ。

風呂場の水音が止んで、1号がパンツ一丁っていう裸同然の格好にタオルを引っ掛けて戻ってきた。

ベッドは俺が腹這いになって占領していたから、1号は傍に椅子を移動させて座った。

「どうして続けてるのかって？」

普段の時に改めて訊くのは照れが入る。一応事後らしい今が良い機会かと問いかけしてみた。

「楽しいから」

「分かるけど、そうじゃなくって。最初の時アトリエで、なんで手え出してきたんだよ」

「あの時は……雪がオレをからかっているのが分かっていたから、同じノリで返そうとした」

俺のせいか。

それにしたってと突っ込みを入れたい気持ちはあったが、上手い言葉が見付からなかった。返す言葉も無いってところか。

「じゃあ、その後も何度もしてるのは？」

「雪が気持ち良さそうにして喜んでたから。もっとそうなって欲しいと思った。もっとそういう姿を見たかった」

ふうん？

てめえの欲求を満たすためじゃないのかよ。

それとも俺のイキ顔が気に入ったとでも？

1号はそっと目を伏せ、再び開く。俺の顔を見てやわらかな声で言った。

「オレは雪に感謝してる」

「はあ？」

今度は何を言い出すんだ。

「俺、おまえに感謝されるようなことなんかしたか？」

「オレは雪のお陰で復讐以外の生きる道を見付けられた」

「さっぱりわかんねー、何がどうしてそうなった」

「……月で：雪と協力して地球に帰ることが出来た。仲間にもなった。それが理由だ」
どうにも1号の言葉は足りない、具体的には伝わりにくい。

恐らく……復讐相手に対して、恨みつらみとは異なる感情を抱く可能性でも開けたって事なんだろうか。そうだ、あの時『まだ争うのか』とかなんとかヌルイことを言い出した。

こいつにとつて俺は、特に自らの手で息の根を止めてやりたい程執着していた復讐の対象、その一人だったことは確かだ。

何でそうなったかは知らねえけど、俺への感情の変化は1号の中で大きな事だったのかも知れない。

「それで？ 感謝の気持ちがあるとして礼だとか恩返しのもりなのか？」

「そういうことになるな」

「チツ……そんなモンいらねーし、方法は選べっての」

「これに今更文句はねーよ。それ以前の問題だろう。そもそも復讐に生きるようになったのは誰の所為だ」

1号は少し思案した風にしてからぼつりと呟いた。

「……………大勢」

「そう、俺は帝国の人間で、白川家の人間だ」

「雪は雪だ、それに研究者じゃない」

「俺だっておまえのプロジェクトに加担してた……恨みは無くなった訳じゃないんだろ？」

自分で言っただけ自分の心が抉られる。

けれど忘れちゃいけない、変える事も出来ない過去の事実だ。こいつと一緒にいるからこそ、きつと目を背けてはいけない。

「ああ、でもいいんだ。雪は変わった。今も仲間であってくれている。その方がオレには大事だ」

俺の心とは裏腹に、何故か1号は微笑んでいた。

「なんでこんな話題で笑うんだよ」

「少し大人になったと思っただけ……シキといた頃の雪はまるで子供だった」

悔しい、ムカつく、腹立たしい。

言いたい放題言いやがって。

文句の一つでも付けたかったが、1号が口を開いて遮られた。穏やかで、暢気にさえ聞こえる口調で語り出す。

「どんなに自分ではどうにもならない状況に置かれたとしても、選んだのはオレだ。昔は一人で、他の道なんて知らなかった。I u k aと出会って雪と一緒に過ごして世界が広がった。選択肢は幾つもあった、自分で選ぶことが出来ると知ったんだ」

だから今は仲間だと主張するのも選んだ結果ってことか？

……なんだろうな、気が削がれる。毒気を抜かれる。

それでも、復讐だつて自分の信念に基づいて選んだんだろうに。わざわざ自分から捨て去るなんて、思い切りが良いにも程がある。

「甘いな、1号……そんなんじやバカを見るぞ」

忠告か、それとも負けたくない気持ちがあるのかな。

「なんだ、また敵対するのか？ そうなったら、うーん……」

「仮定の話に意味は無い。だいたいおまえ、敵対関係に戻りたいなんて思っただけじゃないか」

「よく分かるな」

また1号は嬉しそうな顔をする。

「あーあ、単純、馬鹿」

1号の表情がそろっと変わる。いつものようにひどい言われ様をしているって顔だな。

ある意味うらやましい、褒めてるんだ。

きれいに割り切りやがって。

それはおまえの長所なんだろうよ。大事に……しろよ。

……で、何を話していたかと。

少し話を戻そうとしたら、つい笑みが零れた。

「フン………それだけか？ おまえ自身の下心や不純な気持ちは無かったのか？」

最近の『遊び』の話題だと気付いたらしく、1号も合わせてくる。

「それもある」

スバツと即答だ、正直な奴。そういうところは嫌いじゃないぜ。

「……さっきのあれは？」

「あれ？」

「俺とやりたいつつうのは？」

「あれは、欲求だ。雪のためとか考えて無くても、オレが凄くそうしたくなってしまうて……」

「そうそう、おまえはそういうんで良いんだ。自分の欲望に忠実な怪生物、そうではなくちやあな。もっともらしくて真面目腐った理屈なんか似合わねえ」

理由らしいものを問い質そうとしたのは誰だって？

まあ許せ1号。

はぐらかさずにはいらなかった。

「……いいのか？」

「ん？」

「雪としても」

ほう……そういうイミで捉えてきたか。

「フフ………さあな……」

感謝………ね。

それが妥当なもんかは分からねえけど。

俺だって1号に思うところはある。

何度か助けられて借りになっているとか……

どう表現したらいいか分からない感情も抱えている。

ペガサスに変異した時と人間に戻った時、俺が生きていることを余りにも素直に強く喜ばれた。家族以外にそこまで思われたことは無くても、もう忘れることが出来なかった。

他にも強烈に心に刻まれていることは、幾らでも。様々な出来事が積み重なっている。

俺こそ何も返せちゃいない。

1号はそれなりに考えていたんだな………

目を閉じて、シートに顔を埋めた。

会話はもう終わりだ。

これからどうしようにもだ。

俺達の間に横たわる過去は大き過ぎる。

全部無かったことにして気楽に互いに幸せなんて関係はあり得ない。

今の多少の穏やかさだっていつまで続くか分からない、この先ずっと一緒にやってわけでもねえんだ、限られたものなんだろう。

それでも俺と関わって行こうと言うのなら……おまえが飽きるまで付き合っただけうか。

おまえの為だけじゃない。

俺だって良い思いをするだろう、そして……

関わりを続けりゃ失うものもきつとある。

既に、自分のために1号を切り捨てると言う決意は崩れて、過去の物になってしまった。

……中途半端はいけねえよなあ。いつまでも心のしこりになって残り続ける。

だったらいっそ、こいつとの付き合いも踏み込むところまで踏み込んで、とことんやるつても手かも知れないな。

済し崩しだったとはいえ、とうに仲間という状態を受け入れて、今でも律義に続けているんだ。

関わり過ぎると甘えだとか離れ難い気持ちが生じる懸念はあるが、みんなひっくり返して差し出してやろうか。

他に何が出来るか分からない。

思い付いたらその時にまた考えるさ。

「雪、眠るのか？」

静かな声が掛けられる。

「少し……目を瞑ってるだけだ」

椅子が小さく軋み、足音が続く、グラスに水を注ぐような音が部屋の中に響いた。

この本をお手に取っていただき、どうもありがとうございます。
後書きと妄想語りなどをつつらと書こうと思います。

☆... コンセプト

雪と1号のカップリングが病気でレベLvで大好きです。

1号は基本ですね、そして雪1とかリバとかも大好物なのですが残念ながら
(本格的にエロいのは) お目に掛かれませんが。

色々妄想しているけれどR18なものやちゃんとオプで本を作った事がなかった
ので今年こそは作ろう！という意気込みです。

過去にwebで公開したものを改稿して収録しました。

☆... 今回のネタのきっかけ

いつもお世話になっているヤズミさんと以前お話している雪と1号について
伺ったところ、『喧嘩してそんなイメージでご愛嬌ではないけれど、ふざけて
抜き合いつつことあるかも』とのコメントをいただきまして。

うんうん、素敵ですねー。

時は流れて私の中でじわじわと燃え広がって本作が出てきました。

ありがとうございます！！

しっかりとご愛嬌になってしまいました。

☆... 内容について (触れつつ萌え語り)

・ 刷り損じの春画 (p.8)

1号さんがおかしいのは、正気に見えて実は混乱しているからかも知れない
、そうじゃないかもしれません。

ちゃんと出来なかった不合格品なので、その効果は……どうでしょう。

混乱混じりで時々正気を取り戻しては『なんか雪とすごいことしてるぞ、何が
起きてるんだ？！』って驚きつつも楽しくて流されてまた混乱……なんて想像し
たら脳から快樂物質がだばーっと出ました。

・ てめえの欲求を満たすためじゃ… (p.22)

雪が1号に対して「おまえそう思っただけじゃねえの？」ってところですね。
このくだりはそっくりそのまま雪が1号に対してそう思っているってことで
ございます。

自分も欲求を満たせるし、相手の反応も良くって魅力的。

本人ははっきり自覚してなくても心のどこかでうっすらと。

もちろんそれだけじゃありません、動機は単純で複雑な二人です。

・ 1号が復讐をやめた理由 (p.23)

敵対関係の存在と一時休戦して協力する、無いことではありません。あくまで
一時的なものだった。

talk-2

しかし協力して帰還を成遂げた事実が1号にとってかなり大きかったよう
です。

だからと言ってこんな簡単に信頼するのは純真無垢に過ぎるというものでは
ないでしょうか。世の中には裏切りだって山とあります。

ここで1号の生い立ちを考えると……ずっと閉じ込められて世界を知らずに
生きてきて、脱走して一人で過ぎて、lukaがやっとなら来た初めての仲間です。
経験と知識は厳しく限られ、そこから価値観が形成されています。無理からぬ
ことかも知れません。

更に雪への好意に因る影響も受けています。

そして…雪の甘さとベガの存在に助けられて彼は望んだ形を手に入れました。

やったね1号さん。

対する雪。あんまり1号を信用するのどうかと思いつつ、本人は気を付けよ
うとしていますが、結果的には心の許し方は相当なもの。脳内雪さんが1号を
大好き過ぎていけません…

・ そもそもなんで必要なの？

この問いは私にとって、どうして好き (公式・調査書) になったの？と同義で
混じっています。

今までに考えたこんなんじゃないかなーというのを以下にいくつか。

1. 理由なんて無い！雪だから！

2. 地球に戻るために雪の力が必要だ、殺しちゃだめだ、必要だ、殺しちゃだ
めだ……と延々自分に言い聞かせているうちに、自己暗示的に雪自体が必要だ
と思いついたに至った……という萌えとときめきの足りない案ですが、けっこう
アリなんじゃないかと思いついてます

3. 昔水槽のガラス越しに出会って、最初は好感を抱いていた

4. 月で雪が哀れになった、変異して自分と同じようだと感じた (ええ、雪さ
ん色々ありました) 哀れの意味は複数あって、かわいそうで惨めで心ひかれ
るところです

5. 作り手及び育ての親(?) のシキに似た、なんだかんだで兄さんは弟好き

6. 真面目な話をすると、殺すことしか考えてなかった復讐相手と仲間になる
ことによって自分は変わるかも知れないと思ったから。希望が見えて逃した
くなかったし、雪といればその思いを忘れずにいられるんじゃないかと。キン
グスター〜月で僅かな時間ながらも仲間というものの良さを知って、それまで
の自分の生き方を見つめ直したくなった。この辺りの発想は幸運の夜空より

……並べてみると色々ありました。忘れてしまっているものもまだあるかもし
れません。そして答えはユーザーの数だけ存在することでしょう。

雪→1号についてはまたいずれ…

・どんなに自分ではどうにもならない状況に置かれたとしても… (p. 24)

語る1号。

今回のお話は42話及び記憶の湖以降、第50話前という時期を想定しています。

後に1号がとった行動を思うと、とても皮肉なことです。

RSは容赦なく希望と絶望と皮肉と…様々なものに満ちあふれて、鮮烈です。

一方ゲームを長く遊んでいると、繰り返し行動や時折得られるご褒美（例えば目標達成）などで癒されます。ありがとう、RS。

・はぐらかしの雪 (p. 26)

雪から1号への人外扱いは子供の頃からのもので、考え方の基本となって染み付いてしまっています。(という妄想)

後に憎悪の元となったんじゃないかと想像しています。最初は子供の雪にはよく理解出来なかったけれど、成長に伴って恐怖や罪悪感と共にじわじわと。時期的にはRSより前のいつかのイメージです。

憎悪を抱く前後まとめて結局1号は人外怪生物。概念を変えないのは安心感にも繋がると思います。

さて雪さん、求められるの好きです。そう思われたい、言わせたい。半ば無意識、微かに意図的くらい感じ(あくまでも本人の感覚)で誘導しました。都合の良い考え方も逃げもして(…というところが愛しい)

ズルイ子です。さすがハルさんの息子。

でも狡猾という域には至らないかな。シキの方が気質を受け継いでいて近いと思います。

・1号を切り捨てる決意 (p. 28)

かつて雪は自分のために1号を切り捨てようとしていたんじゃないかなという夢がありまして、勿論兄さん絡みなんですけど。

1号が雪を必要だと言ったのもある意味利己なので通じるところがあります、中身は全然別物ですが。補足しておく、欲求は生きて活動して行く上で大事なものです。良い悪いとかじゃないです。

小さなお話として形にしたいです。

・エロ

折角の成人向け本なのでこういうネタも書きましょう。

雪は色々知ってて色々出来ます。だつてにいきn_____

今回あまり活かされていないのは…気持ち先行ではなく突発的に始まったことから勢い続きだったからではないかと。

1号さん、この先に期待してください。

ちなみに1号は天然成長型だと思います。ポテンシャル高いですよ。

・それにしても

ここまでやっておきながら二人とも「好き」とひとことも言いません。なんで！脳内の彼らはすっごく思ってるのになんで！

あー、分かりました。言い出したら私が身悶えてどきどき度合いが大変なことになってしまって心臓がヤバイな理由で自分で自分の腐脳にストップを掛けるのかも知れません。

二人ともいっぱい言っているのよ。むしろ聞かせてください。

1号は言ってくれそうだけど雪がかたくて言わないこと言わないこと。だからたまに言った時の破壊力が凄いです。あ、私の脳内のお話です。

☆…さいごに

文字がいっぱいですね。語りだすと止まりません。

昔の同人誌のフリートークページみたいにしてみたくて、webで気ままに語っているノリで詰め込んでみました。

それではこの辺りで。

少しでも楽しんでいただけましたら幸いです。

アンディー・メンテ / R S ファンブック
2012.10.07 REM

奥付

アトリエ遊戯

2012年10月07日 発行

サークル REM

発行者 R

連絡先 <http://rem2.x.fc2.com/>